
IS とある少年の異世界記

疾風S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS とある少年の異世界記

【Nコード】

N0053T

【作者名】

疾風S

【あらすじ】

神から見放されたのか、なんだかわからないが、いきなりISの世界にいた主人公 八神 相馬。彼は自分の世界で見つけられなかった居場所を見つけることができるだろうか。「ISってなに？MSやASと違うの？」

注：この小説にはチートや俺TUEEE成分・強引設定・独自解釈が多く含まれています。それでもいいという方のみお読みください。R-15や残酷な描写は念のためです。

第一話（前書き）

第二作目となります。前の作品がすっかりしてないのでこの作品もなかなかひどいですが生温かい目で見ただけですと助かります。

第一話

漫画やアニメや小説にたまにある死んだらよくわからないところ
にいてそのまま異世界に行くとかいう話ってあるよな。俺も、今、
異世界にいる。だけど…

なぜいるのかもわからないし、死んでもいないんだが……

「はっ？」

思わず間抜けな声が出た。

「こっ、どっだよ」

見渡すと、荒廃した街みたいなところに俺はいた。

俺は普通に学校から帰っていたはずなんだが…

俺は八神 やがみ 相馬 そじま ピッチピチの16歳！……言ったら気持ち悪く
なった……。高校1年生。成績は中の上くらいかな。

部活は特に所属していない。中学から毎日帰宅部部活動をしてい

る。友達は……聞かないでくれ。

別にコミュニケーション能力が低いってわけではないと思う。人に聞かれたらしっかり返せるし、話題にだっただけでほとんどついていける。

ただ、なんだかよくわからないけど、ここが自分の居場所じゃない……みたいな気がするんだ。何言ってるかわからないと思うし、わかったとしても厨二病だと思われると思うけど、そんな感じなんだ。と、言うわけで友達は少ないし、家でパソコンの前にいることも多い。ただ、引きこもりではない。

真面目ってわけじゃないが、特に問題を起こしたいとも思っていないので酒やたばこや薬をやっていた覚えはない。いや、記憶にないだけかもしれないけど。

と、いうわけで自己紹介終わり。なんでしたかって？いきなり記憶喪失になってないとかの確認とこんな場所にいる理由がないかな……という確認だ。

まあ、現実逃避はやめて、どこだか調べないと。

最近の携帯って便利だよな。すぐに自分の居場所が調べられ……か、かばんがないだ！俺は携帯はかばんに入れておく主義であって、そのかばんがないとなると……

OTL

便利なものでも持っていないと意味ないよなということを学んだ高校一年の夏……夏？

「なんか、夏にしちゃ寒くね？」

今年の夏は非常に暑いと天気キャスターのお姉さんがいっていいはずなのだが、それにしちゃ寒いな。

俺にある直前の記憶も暑い外からちやっちやか帰ってクーラーのきいた部屋にいたいと思っただけだ...

まあ、とりあえず、

「歩くか...」

歩けば何かあるかもしれないという期待に胸を膨らませ...何もなかった時の絶望を考えないように...俺は歩き出した。

「何かあるかな...」

適当にぶらぶらと歩いて(ただ目標がないだけでも言う)崩れそうなるビルを曲がって、

「つつ!」

何かを感じて俺は曲がろうとしたビルの陰に隠れた。勝手に冷や汗がでてくる。

そのまま顔を出して見てみると、なにかよくわからない。背を向けて動いている機械があった。よく見ると人型なので俺は、

「MS? いやASか?」

と呟いた。

その瞬間。

すごい勢いでその機械がこっちに振り向いた。

「なっ!」

あのつぶやきが聞こえたのか？ん？あれ？今俺だけじゃなくてあ
つちの方からも驚いた声が聞こえたような…

見るとあちらの人も驚いているのがわかる。なぜ？

そう思いながら見ているとあちらの方が怒鳴りだした。

「おい！ここにはだれもいないんじゃないのかよ！」

一瞬、こつちが怒鳴られたのかと思ってビクツとしたが、そのあ
とも断続的に独り言みたくしゃべっていることから、通信をしてい
るのだろうと推測。そして、だれもないはずという言葉から、人
がいてはいけないとも推測。その結果、この相手が通信に怒鳴って
いる間に逃げるといふ選択肢を取ることにした。

逃走を開始してから約5秒すると、

「待ちやがれ！」

なんてセリフが聞こえてくるが、それを無視。そのまま逃走する
が、

「くっ！はええ！」

それなりにあった差が、もう縮まってきた。あと、3秒もしない
うちに追いつかれるだろう。

「くそっ！」

建物と建物の間を曲がる。曲がってから、ラッキーなことに気が
ついた。この道は狭く、両側には高い建物がある。ここは、あの
機械じゃ通れない。

そのまま通って行き、逃げだす。これなら少しは時間が稼げる。そう思ってた。

「残念だったね」

そう言って、俺の上を飛び越してくる機械。こいつ！飛べるのかよ！

無意識にASと同じように飛べないと思っていた自分を呪う。

銃器を構えて、撃ってくる。そんな人がかわせるわけがない！

せめて！せめて同じようなものがあつたら逃げられたのに！

そうやって思い浮かべるのはRX78-2、通称ガンダムだ。あれのようなMSがあれば！

その瞬間、俺の前に白い物体が現れる。そいつは、俺に向かっていた弾をはじいていた。

「なっ！」

相手が驚いている。そりゃこっちも驚きたい気分だよ。いきなり現れるのだから。

そいつは、こちらを向いて、しゃがんでいた。

白を中心としたカラーリング、胴の部分は青く、赤色の盾ついた黄色の星、極めつけはヘッドの位置にある白いV型のアンテナ。こいつは、

「ガン……ダム……？」

ただ、疑問なのは18mもなく、コクピットになるう位置が人
人入れるスペースになっていることだろうか。

第一話（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がございましたら教えていただけるとありがたいです。

第二話

ぼうつとしていたのもつかの間、俺は、こいつに乗り込むことにした。

こいつがガンダムなら動くはずだ。動いたなら逃げられる可能性が増える。

そう思いながら乗り込む。

乗り込んだのと同時勝手に起動が始まる。目の前に表示される画面はオールグリーンを表す。さらに、俺の視界が広がっていくのがわかる。それは、後ろにいる敵さえも見えるようになっていた。ここで、余裕ができたからか相手が女だということに気がついた。

動かし方もわかる。「こいつ、動くぞ」と言いたい心を抑え、振り向く。

ここで、俺は初めて敵と向かい合った。

「なっ……っそだろ……」

敵が絶句しているのがわかる。そんなに俺が動かせるのが意外なのだろうか。それとも、いきなり出てきた機体が動くことに驚いているのかはわからない。ただわかるのは、このタイミングがチャンスだということだ。

彼は知らない。彼が乗っている機体がMSではなくISというものだと。そして、ISはただ一人の例外を除いて女しか動かせないことを。

俺は遠距離武器を使おうとする。そこで気がついた。

……ビームライフルがない……

他の遠距離武器をもっている形跡はなく、武器は後ろのビームサーベル2本とヘッドバルカンだけということがわかった。

やばいぞ……これ。

ただでさえ素人が初めて動かした程度で逃げられないかもしれないのに、遠距離武器がないなんて、さらに可能性が狭まっている。それでも、ないよりは可能性がある。あきらめる必要はない。

俺は行動にでた。

背を向けて飛んで逃げるといふなんともかつこのつかない行動に。

「は……？」

相手からすればよくわからないだろう。いきなり機体に乗る、向かい合って戦うかと思いきや、背を向けて逃げだすのである。これはわけわからんポイントをあげてもいいだろう。

「ま、まちやがれ！」

わけわからん状態（俺が命名）から立ち直り、追いかけてこようとす。

その瞬間に、俺はバックパックに内蔵されているビームサーベルを抜き出し、回転しながら投げつけた。

「なっ！」

敵はそれをよけるが、だいぶ体勢が崩れた。そして、俺はそのまま逃げだした。

ここでも、彼は知らなかった。ビーム兵器はまだほとんど開発されておらず。あるのは遠距離武器だけで、近接武器まだ開発されていないということ。

ここまでのわけのわからないことも相まってか、彼は命からがら逃げだすことができた。

「とりあえず、逃げさせたか……」
俺はほっと息を吐く。そして、これからのことを考える。

まず、このままそこに戻るのはまずい。まあ、理由はいわなくてもわかるだろう。

ただ、他に行く場所がない。
ということ、俺はそのまま、適当に見えた陸を目指すことにした。

「あれ？」

いつの間にか俺はその陸の近くまで来ていたらしい。まったく、気がつかなかった。

「警告はした。これより、目標に対する自衛を行う」

あれ…なんかやばい…というか警告ってされた？そこで、俺は気がついた。自分の集中力が切れていることに。

「もしかして、今まで警告されてたけど、気がつかないで無視していたんじゃない？」

そんなことを考えていると、地上からミサイルが発射された。

「っ！やばっ？」

発射されたミサイルは全部で6発。対して、飛んできたミサイルを落とせる武装はヘッドバルカンのみ。

これ、なんていう無理ゲー？

ってそんなことを考えているうちに近づいてきた。

おいおい、まだ俺は死にたくないぞ。ここがどこかもわかってないし、なぜここにいるのかもわからない。なにより、俺は青春しきってない！

友達と馬鹿やりたいし、恋人だっていない。まだ、ここで死ぬるか！

そう思った瞬間、頭の中で何かがはじけ、意識が鮮明に冴えわたる。

反転しヘッドバルカンで2発のミサイルにあて3発を誘爆させる。だが、あと1発。

左手のシールドで防ぐがシールドが吹き飛ぶ、機体損傷は軽微。

爆発の勢いを制御し、半回転しながら加速、逃げきることに成功した。

「はあ、はあ、はあ」
自分の荒い息遣いが聞こえる。もう集中力はほとんどないし、意識も朦朧としてきた。

ここまで、素人がよくもった。自分で自分をほめてやりたいね。と落ちそうな意識のなかで思った。

だんだん高度が落ちてきていることに彼は気付いていなかった。

side out

side 千冬

この日、私はもうすぐ入学式ということでアリーナの点検に山田先生と来ていた。

「それにしても、織斑先生の弟さん、一夏君でしたっけ、すごいですね。男で初めてISを使えるんですよ。これも織斑先生と関係あるんですかね？」

横から話しかけてくる小柄で、まだ中学生のようにも見えるのが山田先生だ。少し頼りないが、まあ仲はいい。

「まあな。山田先生を倒してしまうくらいには強いんじゃないんでしょうか」

「あつ。そ、それは……」

うちの馬鹿者は山田先生に試験で勝ったが、理由が山田先生の自爆だ。びっくりして、突っ込んで、自滅した。

どうも本番や予想外のこと弱く、これが原因で代表候補生止まりだった。実力だけなら代表候補になってもおかしくなかったのだが。

「まあ、あいつのことはどうでもいい。とりあえずこのアーリーの点検を終わらせようか」

今日、特に大きな問題がなければ、久しぶりに明日は休暇が取れる。そうなれば、自宅に帰って一夏に会うこともできるだろう。

明日のことを思いながら山田先生と点検を開始しようとする、緊急を知らせるブザーが鳴って放送が入ってきた。

「緊急事態発生。緊急事態発生。学校上空を正体不明のISが通過中。日本政府より捕獲命令が出ている。至急、教職員はISで捕獲せよ。繰り返し……」

「えっ、えっ」

山田先生がおろおろし始める。もう少ししっかりして欲しい。

そんな時、視界に白いものが映った。見上げると訓練機ではないISがふらふらしながら飛んでいた。

「山田先生！」

隣にいる混乱中の山田先生に呼び掛ける。今日の点検の最後には、ISを使つての検査もあつたため山田先生が訓練機を持ってきている。

「わわわ、は、はいい！」

いまだに絶賛錯乱中の山田先生が返事をする。

「上を見る。ISを展開し、捕獲に当たれ！」

こういつときの山田先生にはわかりやすく命令してやった方がいいということが今までいっしょにいて、わかっている。

「は、はい」

私の命令の通りに行動を起こすのを見て、正体不明のISの方を目を向けるとこちらに落ちてきていた。

「先生！」

「は、はいい！」

私はしまったと思つた。わかりやすく命令した方がいいとさつき思つたはずだろう。ここで、山田先生は銃を構えてしまった。捕獲なら落ちてきているISを受け止めるような形を取るべきである。シールドエネルギーが尽きかけているのかもしれないし、なにか機体やPICに問題があつたのかもしれない。ともあれ一度そうしてしまつたところに新しい命令をだしても混乱するだけと判断して、私は成り行きに任せた。

side out

side 相馬

どこにいるのかも、自分がどういう状態にあるのかもわからない。飛んでいるのか立っているのか、座っているのか寝ているのか。もう集中力もないし、意識も飛びかけている。ただ、なにかが、銃を構えたのが見えた。

「っ？」

俺は残っているビームサーベルを抜き、構えようとして、意識が急速に落ちていった。

side out

side 千冬

敵が武器を抜いてきた。その武器を見た瞬間私は驚いた。
ビーム兵器！しかも近接武器！

ビーム兵器はまだ、ほとんど開発されていないことは知っている。やっとイギリスが実用可能程度まで作り上げ、今度その実験機が学園に入ってくるということも。ただ、そのイギリスでさえ射撃武器としてしかできていない。そのはずが、こいつは近接武器として持

っている。

やばい！と思って私も構えたが、その瞬間に、彼のビームでできた剣が消えて、落ちてきた。

高度が低かったため、そこまで砂が飛び散ることはなかった。ここで、山田先生の方を見ると銃を持っている手が震えていた上に、標準が15度以上ずれていた。

「はあ、よかった」

山田先生はもう安心しているが、そうはいかない。

「山田先生、武器を構えたままにしておいてください」

「は、はい」

私が近づいていって見ると、ISが待機状態に戻ってその場に一人が残されている状態だった。

「男…なのか」

服装や髪形から判断すると男のようであった。意識を失っていた。

「先生、武器をしまつて、こっちに来てください」

「は、はい。…で、乗っていたのは…男の子！ですか！」

私が近づいてみると息が荒い。触れてみると熱がかなりあることに気がついた。

「先生、職員室に通信を。私はこいつが熱がいるようなので、保健室に連れていく」

「わ、わかりました」

山田先生の了解の声を聞きながら、この正体不明のISに乗っていた。ISを動かせる二番目の男になるかもしれない人物を運びながら、今回の休暇はなしかと残念に思っていた。

第二話（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等ございましたら教えていただけるとありがたいです。

第三話

side 相馬

「ん、んあ、…ここは？」

目が覚めたら、俺は寝ていた。白い天井、見渡すとなんとなく学校の保健室に似ている気がする。で、ここどこ？

「知らない天井だ」

とりあえず知らないところで寝ていたときに言うセリフはこれでもいいだろう。

で、なんで知らないところにいるんだ？

とりあえず思い出してみようか。たしか、学校に行つて帰ろうとして………………

少年回想中……

うん、思い出したよ。思い出したくなかった…。それは置いといて、ここどこ？なんか追いかけられた時より後が記憶にないんだけど…。また、俺知らない場所にいるんだけど。

「気がついたか」

そういつてドアから入つて来たのは黒い服を着た気の強そうな女性。年は…23歳くらいだろうか。雰囲気がしっかりしているせいかもしれない。なんとなくキャリアウーマンって感じ？

「まったく、侵入者だと聞いて対応したが、どこから来たんだ？」

疲れているような声で聞いてくる女性。侵入者？とりあえず弁解しよう」

「ええっと、実は気がついたら知らないところにて……………」

少年説明中……………

「で、何故か知らないけど追いかけて気がつくところにいる」

「なんだか胡散臭いな」

ええ、自分で説明しながらもなんとなくそう思っていましたよちくしょー！でも仕方がないじゃん。わからないことだらけだったんですから。

「とりあえず、ここがどこかを教えてもらいたいのですが」

「ここはIS学園だ」

IS？なんの略だ？と思って聞いてみる。

「ん？ISと言えばインフィニット・ストラトスの略に決まってるだろう。しかもIS学園と言えば世界的に有名だぞ？」

What？俺はそんなの知らないぞ？インフィニット・ストラトスってなんぞや？IS学園っていう学校も知らないし。

そう、俺が伝えると、

「は？」

という声と顔をしてくれた。

「いや、ISってなんですか？」

もう一度聞くと、

「……」

なにやら考え込んでいた。

しばらくしてこっちをむくと、

「お前、もしかして記憶喪失か？」

と、聞いてきた。

どこにそんな要素があった！？と考えてみたが、思うと、まず自分の説明がいきなりわからないところになっていたからしか説明してない。そして、100人に聞くと120人が知っていると答えるような基本的なISとやらを知らない。

うん、なんだか記憶喪失っぽいかも…

でも、記憶はあるし…もしかして、並行世界？

いや、まさか、そんなわけ……ないとも言い切れないんだよな…。

と、言つてこの女性に話すと、

「そうかもしれないな……」

普通に信じてもらえました。

「なんで信じたんですか？」

「まあ、いくつか根拠はあるが、まずISについての説明をしよう」

女性説明中……

ISについては少しわかった。自分が乗ってたガンダムもISの一種らしい。そして根拠は、

「女性にしか動かせないってところですか？」

「そうだ」

このISとやらなぜかは知らんが女性にしか動かせないらしい。そのせいで女尊男卑の世界になってるとか。俺の世界じゃそんなこと聞いたこともないしな。でも、最近男で動かした奴がいるということもいつていた。

実は、俺の乗っていたISは新技術のオンパレードで、さらに解析もできなかつたらしく、初めはどこかの実験機だと思っていたらしい。

でも、俺の態度で本当によくわからないのだと理解してらしい。実験機をもらったけど、なんらかの事故で記憶をなくしたからわからないと思い初めは記憶喪失かと思ったというのだが、もし昔から俺がISをもっていて動かせたならもつと有名になっているはずということである。と思い、異世界から来た説をとつたらしい。

まあ、ぶつちやけどうでもいいや。疑われてなければ。

「そうなるよ、お前には戸籍も家も家族もないということか」

……………？やば。どうすんの俺。

「さらに、お前は無断で国境をこえていたからな。日本政府からも追われているぞ」

お、俺の平穩わあああああ！

頭を抱えていると、

「とりあえず、お前はこの学園に入れ」

「へ？」

第三話（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等ございましたら教えていただけるとありがたいです。

第四話

「どついうことですか？」

俺は尋ねた。なんの意味があるんだ？

「まあ、お前の後ろ盾を作ろうつていうことだな。この学園に所属すれば、どの国にも帰属しないというものがある。それを使えば、お前はIS学園籍となる。幸い、この学園は全寮制だ。そこに住めばいい。お前のような男のIS操縦者は2人しかいないからな。いろいろと性能テストにでも参加すれば金はあるだろう。あとは、国境を越えた件はうまくごまかしてやろう」

まあ、いいことづくめなこと！……きもいな、俺。それは置いて、メリットはわかった。だが、俺にとってのデメリットがなさすぎる。

「まあ、デメリットとしては、

と、思っていると女性が話し初めてくれた。

「実験みたいになるからな。なにせ男の操縦者は2人しか世界にいないんだ。悪く言えばモルモットだな」

そうか、それはデメリットだが、まだあるだろう。でも、ここに入るメリットのほうが大きいと信じることにしよう。

「わかりました。この学園に入りましょう」

「交渉成立だな」

これは交渉なのだろうか……まあいいか。

「とりあえず、明日からいろいろとし始めなければならんな」

窓を見るともう夕焼けになっている。あれ？

「俺って何日寝てたんですか？」

ふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「2日だな」

「えっ……」

そんなに寝てたのかよ俺…。

「とりあえず、明日からは忙しくなる。今のうちに英気を養っておけ」

明日、明日から俺の新しい生活が始まる。俺は今度こそ居場所を見つけられるだろうか。

「そういえば、自己紹介をしていなかったな。私の名前は織斑 千冬だ。ここでは織斑先生と呼ぶように」

織斑先生ね。覚えた。

「俺の名前は八神 相馬です。明日からよろしくおねがいます」

こうして俺は、IS学園に籍を置くことになり、異世界での生活を始めた。

第五話

俺のIS学園生活1日目、俺は昨日まで寝ていたせいか、結構気分のいい状態で起きていた。

「とりあえず、顔洗って、着替えるか」

昨日はこの保健室で寝た。別に大した事件はなかった。夜に幽霊があらわれるとか、暗殺者がくるとかもなかったので少し残念にも思えた。(暗殺者には来てほしくはないが…)

いつもやっていたように顔を洗って、着替えてから………することがない。

昨日であるが、あれからいろいろと話した。まあ大半は常識についてだ。俺の立場は昨日時点では侵入者だったらしい。らしいというのはここに来た記憶がないからである。なんだか意識が朦朧としたままとんでたからなあ。

あと、今は春らしく、この学園は春休みだそうだ。

聞いた時には驚いた。日付もかわっていたとは…。

と、いつてもこれは好都合でうまく織斑先生の方でこの学園にいられてくれるらしい。高一として。高一ならまだクラスメイトを知らないからごまかしていれられるそうだ。

今日はISについての基本的な説明と、他の勉強の進捗具合を調

べると言うことだ。

部屋の中で少しの間ぼーっとしていると、織斑先生が来た。

「起きていたか。とりあえず昨日話した通りにいくからな。朝飯は食べながらいくぞ。」

そう言って出されたのはどこにでも売ってそうなパン。というか食べながら歩くって教師！それでいいのか？

「今日から予定が詰まっている。あと3日しかないのだからな。」

実は、4日後が入学式なので、それまでにISについて女子が今までずっとかけて習ってきたことを3日である程度まで覚えなくてはいけないというなんとも鬼畜なことをしなくてはいけない。

まあ、言っても仕方がない。なので、いろいろと覚えなきゃならない。あんまり覚えんの好きじゃないんだけどな。

「そう言えば、八神の立ち位置はISについての記憶を失っていて、自分がどうしてISを起動できるのか、そのISはどこで貰ったのかを覚えていないということになった」

「へっ?」

「異世界から来たというよりまだありそうな話になっているし、これならばどこの企業や国からそのISを貰ったなんて気にしなくてもよくなるからな。まあ覚えておいてくれ」

それなら俺は普通に過ごせばいいっぱいな。なら楽だ。

予定では午前基礎学力の確認だ。テストをやるとかなんとか…。
テストつてめんどいなとぼやきたい気分、俺はパンをたべながら織斑先生に着いていった。

「だあ〜！終わった〜」

とりあえず午前の部終了。難しかったが中学の内容からなのでそれなりにできた。

「このあとはISの基礎についての授業だ。少しの間の休憩だが大切にしるよ」

と、言いながら朝渡してきたパンと同じものを昼飯として渡してくる。……これしかないのかな…？

「別にこれ以外がないわけではない。ただ、選ぶのが面倒だった」
そう言ってこの教室から出ていった。

心を読まれた！？というかそれでいいのか教師！

……まあ食えるものだけまし。これ食って休憩だし寝よう。

そう思いながら俺は、朝と変わらないパンを食べた。

「起きろ！午後の部開始だ」

ゴッソ！

「いつてええええ！」

寝ていたらいきなりなんかで叩かれて起こされた。叩かれたところを押さえながら見ると織斑先生が出席簿片手に立っていた。

休憩だから寝てただけなのに叩かれて起こされるなんて理不尽だ……。言っても無駄だろうから言わないけど。

「今日からやる授業の内容は一回で覚える。時間がないのだからな」

む…無理っす。

「まあ、わからないと言われても一回しか説明しないがな。じゃあ、始めるぞ」

そう脅しながら始まった授業は日が暮れるまで終わらなかった。

プシュ~~~~~

あ、頭から煙が……。

「今日はここまでだが、明日は朝からISについての授業だ。午後
は実習として八神にISを起動してもらおう」

ういっす…:…と言う気力すらなく、俺は机に伏したまんまだった。

「ほら、ちゃっっちゃか行くぞ。お前の部屋が決まった」

くらくらする頭をなんとか持ち上げて織斑先生に着いていく。

「急ぎよ八神が入ったせいで山田先生が寮の部屋割りが大変だとい
うことだな。お前はしばらく物置となっている部屋で寝てもらおう。
なに、片付けば普通の部屋と変わらない」

その時の俺は、寝ればどこでもよかった。

その後、俺は部屋に入るなりすぐ無造作に置いてあった布団の上
で寝てしまった。

俺のIS学園1日目はこんなのであった。

第六話

俺のIS学園生活2日目。起きて支度をして、織斑先生がまた同じパンを渡してくれるといううれしい…ことはあったが特にイベントはなく、午前の部に突入。

終わった時にはまた頭から煙が出る状態だったが、なんとか乗り切ることができた。

フシユ~~~~~

「ちょっと授業がのび過ぎたな。このまま午後の部に入る」

「あんたは鬼ですか！！！！！」

バシン！

「どっかの馬鹿のせいですっかくの休暇も潰されたのでな。少々不機嫌なんだ」

「誠に申し訳ございません！！！！！！」

お、俺だつてね、来たくてこの世界にきたわけじゃないんだよ。

「まあ、いい。午後の部を始めるから移動するぞ」

そう言って動き始めるので、俺もついていく。

「そつだ。これが昼飯だ」

うん。いつものパンだったよ。もう文句も言つ気はないね。

「それでは、始めよう」

今、俺は誰もいない第三アリーナに来ている。織斑先生は管制室だ。その横には山田先生？という先生もいるらしい。

「まず、ISを展開してみる」

そう言われて俺は手元にある。ペンダントを見る。これはこのアリーナに来る前に織斑先生に渡されたやつで、俺のISの待機状態らしい。形は黄色のVの字で、ぶっちゃんVアンテナだ。

俺は集中してISを展開しようとする。イメージはガンダムのコクピットに入っている感じだ。

すると光が自分の周りに出てきて、3秒くらい光に包まれると俺はISガンダムに乗っていた。

「熟練者であれば1秒もかからずに展開できるのだが……まあ初めてなのでいいだろう」

手厳しいな織斑先生。展開できただけでも俺はよろこんでいたのに。

そう思いながらISが起動し始める。ディスプレイがいくつも表示されていき、完全に起動した。

「とりあえず動いてみる。初めはゆっくりと慣らしていけ」

織斑先生からの指示でゆっくりと動きだす。PICがうまく調整できず、体勢が何度も崩れたが、慣れていくうちに地上での移動のイメージから宇宙空間での移動のイメージに切り替えた方がいいんじゃないね、と思った。すると、けっこううまく動くことができた。だんだんと速くしていき、減速して止まることもできた。

「次に武器を出してみる」

そう言われて、俺はバックパックからビームサーベルを抜き出す。

ビームの刃が出て、少し感動した。

いや、この前出した時はあまり見ずに投げちゃったからね。ゆっくりと見てられる暇がなかったからね。

それから、俺は少し振ってみた。学校で竹刀を持ったことはあったがそれにくらべると軽い。ISの力とビームサーベルの軽さの両方が理由だと思う

「それでは、量子変換されている武器を出してみる」

ビームサーベルをしまつて、指示に従ってみようと思って、愕然

とした。

りよ、量子変換されている武器がない……。

第二世代以降は持っていると言われたのと織斑先生が当たり前のように言っていたから後付武装もあるのかな〜って思っていたけど、よく考えたらガンダムにあるわけないじゃん。元はそんな概念ないんだし。

でも、あと、ガンダムの武器といえばとりあえずビームライフルだよな〜。とか思いながら織斑先生にないって言おうとしていると右手に変化が起きた。

な、なんか光に包まれてる!？。

そのまま、茫然と見ていると、光が収まったところにはビームライフルが握られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0053t/>

IS とある少年の異世界記

2011年5月31日04時28分発行